

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

— ロンドン・リヨン市場の動向と外商 —

杉 山 伸 也

一、問題の所在

後進国における資本主義化の過程は、初期の段階からすでにそれをとりまく既存の国際的経済諸関係の中で条件づけられ、規定されている。⁽¹⁾ 日本の場合も開港を機として資本主義世界市場⁽¹⁾ 国際的分業体系の一環に組み込まれたことによって、こうした⁽¹⁾ 国際的契機⁽¹⁾ を初期条件とし、再生産構造そのものが外国貿易を「不可欠の媒介環」として内包しつつ展開せざるをえなかった。⁽²⁾

生糸は開港以降明治期を通じて最重要輸出品であり、しかも明治期においては⁽¹⁾ 移殖産業⁽¹⁾ 生産手段の輸入を可能にする外貨獲得のための戦略的役割を担い、「まさに日本資本主義興隆の鍵をにぎる」重要な産業部門であった。⁽³⁾ 開港を契機とする生糸輸出の増加は、海外市場における需要の増大を基礎条件と

し、国内における旧来の流通機構の再編をとめないながら、製糸業の発展を促した。生糸に対する需要は、絹織物の奢侈品的性格上非常に不安定で、とくに需要サイドでの景気動向に強く規定され、それゆえ生糸輸出の動向は輸出市場における品質及び価格を含めての他国糸との競争力に依存していたといえる。⁽⁴⁾

幕末、明治初期における生糸輸出に関しては、『横浜市史』第二巻をはじめいくつかの研究があるが、日本の生糸輸出を、世界経済ないしは海外市場とそれに対応する国内製糸業の発展という視角から、つまり供給サイドと需要サイドの両側面から相対的に位置づけるといふ試みはほとんどなされていない。⁽⁷⁾

従来の研究によれば、幕末期において日本の生糸輸出の増大を可能とした要因は、海外市場における日本糸の良質性と低廉性であったことが一貫して主張され、とくに後者については国際市場における日本糸価格の低廉性ととも、国際価格に比較

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

して横浜売込相場が著しく低廉であったという二重の意味を含んでいる。⁽⁸⁾しかし、世界市場への編入ということ自体、国際市場における市場価格の形成、価値法則の貫徹を意味しており、日本糸価格だけが著しく低く設定されることがはたして可能であっただろうか。⁽⁹⁾

本稿は、『英国領事報告』⁽¹⁰⁾及び「ジャーディン・マセソン商会文書」Jardine Matheson Archive⁽¹¹⁾(以下 JMA と略称)を資料として、幕末、明治初期における日本の生糸輸出の動向を、開港以降主要な輸出市場であったヨーロッパ市場(ロンドン及びリヨン)との関連で通説の問題点を再検討することによって、日本資本主義形成期における入国際的契機✓の経済史的側面を照射することを企図している。こうした生糸輸出の発展が国内における製糸業の発展と相互関連性をもっていることはいうまでもないが、本稿では対象をヨーロッパ市場との関連に限定せざるをえなかった。

註

- (1) 中川敬一郎「比較経済史学と国際関係」(『社会経済史学』第二九巻第一号、一九六三年)、八二頁。
 (2) 水沼知一「明治後期における生糸輸出の動向」(『社会経済史学』第二八巻第五号、一九六三年)、四頁、及び同「外国貿易の発展と資本の輸出」(横西光速編『日本経済

史大系』近代下、東大出版会、一九六五年、所収)、二五〇～二五二頁。その他名和統一『日本紡績業と原棉問題研究』(大同書院、一九三七年)、四四九頁を参照。

(3) 中村政則「製糸業の展開と地主制」(『社会経済史学』第三二巻五・六合併号、一九六二年)、四六頁。

(4) C. E. Black & others, *The Modernization of Japan and Russia* (New York: Free Press, 1975)

では次のように指摘されている。「輸出国としての日本の成功は、第一に、生産費を引き下げ、国際市場における輸出品の競争力を維持する能力にあったという意味で説明される。」(p. 191)

(5) 山口和雄、『幕末貿易史』(中央公論社、一九四三年)、石井孝『幕末貿易史の研究』(日本評論社、一九四四年)、『横浜市史』第二巻(一九五九年)及び第三巻上(一九六一年)などがある。

(6) 一九世紀後半期における世界経済については S. B. Saul, *Studies in British Overseas Trade 1870-1914* (Liverpool Univ. Press, 1960. 堀晋作、西村閑也訳『世界貿易の構造とイギリス経済』、法大出版局、一九七四年)、河野健二、飯沼二郎編『世界資本主義の形成』(岩波書店、一九六七年)及び『世界資本主義の歴史構造』(岩波書店、一九七〇年)、毛利健三『自由貿易帝国主義』(東大出版会、一九七八年)、竹内幹敏『十九世紀後半の世界経済』(講座『世界歴史』19、近代6、岩波書店、一

九七一年、所収)などを参照。

(7) 対象時期は異なるが、こうした問題意識にもとづく研究として石井寛治『日本蚕糸業史分析』(東大出版会、一九七二年)がある。また中村政則氏は日本の製糸業のワンスライド・マーケットの性格と他律的に強要された発展を強調されているが、こうした視角からでは日本の生糸輸出の増大を可能とした国内レベルでの対応と発展を正当に位置づけられないのではないだろうか(前掲論文、四七頁)。

(8) 高橋経済研究所『日本蚕糸業発達史』上巻(生活社、一九四一年)、六四―六五頁、山口和雄、前掲書、三三、四九―五〇頁、『横浜市史』第二巻、三七九―八〇及び五二二頁、楫西光速編『現代日本産業発達史Ⅺ』繊維―上(交詢社、一九六四年)、二二―二三頁、海野福寿『明治の貿易』(塙書房、一九六七年)、五七―五九頁、中村哲「開港」(『講座日本史』5、東大出版会、一九七〇年、所収)、六四頁、山崎隆三「幕末維新期の経済変動」(講座『日本歴史』13、近世5、岩波書店、一九七七年、所収)、一四五頁など。

(9) 国内価格の国際価格への平準化については、新保博「幕末期・明治期の価格構造」(『社会経済史学』第三三巻第一号、一九六七年)を参照。

(10) Commercial Reports from Her Majesty's Consuls in Japan 及び Commercial Reports from Her Majesty's Consuls in China (以下 CR と略称)。各々

British Parliamentary Papers, JAPAN 及び CHI-NA, Irish University Area Studies Series, Shannon, Ireland, 1971 (以下 BPP, JAPAN 及び CHINA と略称)を利用した。

(11) ケンブリッジ大学図書館所蔵。ジャーディン・マゼンソン商会文書については横山英「ジャーディン・マゼンソン商会文書」(『史学雑誌』第六八編第六号、一九五九年)を参照。

二、日本の生糸輸出

幕末における貿易額に関しては、すでに山口和雄、石井孝両氏によって指摘されているように、統計技術の未熟さもさることながら、密貿易額、艦船及び武器類の輸入額及び金貨流出額が明確でないうえに、さらに洋銀の減価にもとづく過少評価あるいは過少申告があるために、正確な貿易統計を再構成することはむしろ不可能であるといえる。⁽¹⁾『横浜市史』第二巻によれば、横浜港から輸出された生糸の生糸総輸出額に対する割合は、数量において九七―九九パーセント、価額においても九九パーセントで、⁽²⁾横浜からの総輸出額の五四―八六パーセントをしめていた。⁽³⁾

第一表は一八六〇―六一年から一八七五―七六年にいたる期

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

第1表 日本の生糸輸出額

(単位：梱=106.7ポンド)

年 度	数 量	価 額	1ピクル当 単 価
1860~61	11,318 (100)	3,369,864 (100)	372 (100)
1861~62	11,915 (105)	3,844,023 (114)	403 (108)
1862~63	25,891 (229)	9,493,400 (282)	459 (123)
1863~64	15,931 (141)	6,374,685 (189)	500 (134)
1864~65	16,523 (146)	8,153,031 (242)	617 (166)
1865~66	11,619 (103)	6,916,559 (205)	744 (206)
1866~67	13,564 (120)	8,304,969 (246)	765 (206)
1867~68	12,306 (109)	7,295,044 (216)	741 (199)
1868~69	14,984 (132)	10,582,938 (314)	882 (237)
1869~70	14,436 (128)	9,781,100 (290)	847 (228)
1870~71	8,467 (75)	5,397,203 (160)	796 (214)
1871~72	14,635 (129)	9,171,270 (272)	783 (210)
1872~73	14,428 (127)	7,897,300 (234)	684 (184)
1873~74	14,520 (128)	6,798,800 (202)	585 (157)
1874~75	11,941 (106)	4,663,790 (138)	488 (131)
1875~76	13,591 (120)	4,874,320 (145)	450 (121)

(資料) Review of the Japan Silk Trade from 1874 to 1877, Summary of Commercial Reports by Her Majesty's Consuls in Japan for the Year 1876, pp. 39-41 (*BPP, JAPAN*, Vol.6, pp.245-247).

(註) 年度は7月1日より翌年6月30日。()内は1860~61年を100とする指数。

間の生糸輸出額、一ピクル当りの単価、及び一八六〇と一八六一年を基準年度とする指数を示している。⁽⁴⁾ 生糸輸出は幕末期と同様明治初期⁽⁵⁾においても停滞的であり、一ピクル当り単価も一八六八と六九年の八八二ドルを頂点として急落しており、輸出価額もそれとともに下落している。

生糸の輸出仕向地については、従来パスケル⁽⁶⁾の引用している統計が利用されている。引用資料に関しては出典が明記されていないため不明であるが、他の資料から推定すると外国商館の発行した何らかのCircular⁽⁷⁾であると思われる。第二表は、一八六二と六三年以降の生糸輸出先別について、横浜商業会議所(外国人)の指導下に発行された *Yokohama Prices Current and Market Report*⁽⁸⁾ という市況報告にもとづいて作成したものである。日本側の貿易統計で仕向地別統計の明らかになるのは明治六年(一八七三)以降であるか

第2表 生糸輸出先国別表

(単位：梱)

年 度	イギリス	フランス	アメリカ	そ の 他	計
1862~63	6,862 (26.5) [%]	— [%]	143 (0.6) [%]	18,881 (72.9) [%]	25,886
1863~64	8,979 (56.4)	205 (1.3)	55 (0.3)	5,692 (35.7)	15,931
1864~65	9,492 (57.4)	4,479 (27.1)	—	2,556 (15.5)	16,527
1865~66	7,300 (63.0)	4,082 (35.2)	55 (0.5)	149 (1.3)	11,586
1866~67	8,656 (63.9)	4,684 (34.6)	123 (0.9)	91 (0.7)	13,554
1867~68	5,463 (44.4)	6,195 (50.3)	647 (5.3)	1 (0.0)	12,306
1868~69	8,010 (53.5)	6,156 (41.1)	799 (5.3)	19 (0.1)	14,984
1869~70	8,372 (58.0)	5,804 (40.2)	260 (1.8)	—	14,436
1870~71	7,120 (84.1)	896 (10.6)	353 (4.2)	98 (1.1)	8,467
1871~72	7,946 (54.3)	6,203 (42.4)	56 (0.4)	430 (2.9)	14,635 ¹⁾
1872~73	7,365 (51.0)	5,516 (38.2)	172 (1.2)	1,375 (9.5)	14,428 ²⁾

(資料) 1862~63—1867~68: Yokohama Prices Current and Market Report, No.36, 10 July 1868, in *JMA* C1/46. 1868~69: *ibid.*, No.62, 10 July 1869, in *JMA* C1/74. 1869~70, 1870~71: *ibid.*, No.110, 8 July 1871, in *JMA* C1/74. 1871~72: *ibid.*, No.134, 5 July 1872, in *JMA* C1/75. 1872~73: *ibid.*, No.157, 5 July 1873, in *JMA* C1/76.

(註) 1) 兵庫からの輸出 650梱を除く。2) 兵庫からの輸出 145梱を除く。

ら、第二表は同時に従来不明とされてきた明治初期の輸出
生糸の仕向地をも明らかにしている。⁹⁾
第一表と第二表とを比較すると、総計において一八六七
〜一八八〇年以降は完全に一致しているが、それ以前について
も一八六三〜一八六四年を除いて若干の誤差が見られるだけで
ある。「その他」は大部分が上海向で、開港以降一八六二〜
一八六三年までは輸出生糸の七〇〜八〇パーセントが上海に輸
出され、¹⁰⁾さらに上海で積みかえられてイギリスに再輸出さ
れていた。一八六三〜一八六四年には上海への輸出は前年度に
比較して数量で約三分の一弱に、また比率においても半減
し、これに代ってイギリス向輸出が五六パーセントをしめ
るようになるが、これは一八六四年にP&O汽船会社の定
期航路が横浜まで延長されたために、上海で積みかえる必
要がなくなった結果であった。さらに一八六四〜一八六五年に
は上海向輸出は半減し、その反面フランス(マルセイユ)
向輸出が急増することになるが、これはフランスの対日政
策が生糸貿易をめぐって積極化し、¹¹⁾一八六五年にフランス
帝国郵船会社 *Messageries Impériales* がマルセイユ・
上海線の支線として上海―横浜間に新たに月一回の定期航
路を開設した結果であった。¹²⁾

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

パスケルスマスの統計にしたがえば、イギリスの仕向地はロンドンとなっており、従来でもそれがそのまま利用されている⁽¹³⁾。しかし、イギリスに輸出された生糸は最終的にはロンドンに運ばれたが、実際の仕向地(港)はロンドンではなくサザンプトンであった⁽¹⁴⁾。『米領事報告』によると、イギリス向輸出生糸量は、一八六三〜六四年サザンプトン五、一四九梱、ロンドン皆無、また一八六四〜六五年もサザンプトン九、一二二梱、ロンドン四〇一梱であり⁽¹⁵⁾、さらに一八六五〜六六年に中国からイギリスに輸出された生糸三五、三一一梱のうち三四、四一九梱(九七パーセント)はサザンプトンに輸送された⁽¹⁶⁾。

幕末期には総じて約六〇パーセントの生糸はイギリスに、また三〇パーセント強はフランスに輸出されていた。一八六七〜六八年にはフランス向輸出量がイギリス向輸出量を凌駕し、「ここにいたって、直接消費地に近い港に積出されることになった⁽¹⁷⁾」ようにも思えるが、それ以降の統計が示しているように、明治初期、実際には一八七三年までイギリス向輸出量は一貫してフランス向輸出量を凌駕しており⁽¹⁸⁾、一八六七〜六八年の方がむしろ例外であった。

第二表でみたように開港以降一八六四〜六五年までは日本系はまず上海に輸出された。当時上海は生糸貿易の中継点であ

り、またアメリカ向の商品は横浜から一たん上海に輸出され、そこからさらにニューヨーク、ボストンに再輸出された⁽¹⁹⁾。

第三表は一八五八〜五九年から一八七二〜七三年までの上海輸出生糸の仕向地を示している。この表では一八六六〜六七年までは燃糸及び粗糸が含まれているが、この九年間平均で燃糸は総輸出量の四・四パーセント、粗糸は〇・二パーセントにあたるにすぎない⁽²⁰⁾。上海から輸出される生糸の大部分はイギリスに輸出されており、一八五八〜五九年から一八六三〜六四年までは八〇パーセント以上が、またそれ以降一八七一〜七二年までは七〇パーセント以上がイギリスに輸出されていた。それに対してフランス向輸出の割合は一八六四〜六五年以降もほぼ二〇パーセント前後にとどまっており、一八七〇〜七一年からはアメリカ向輸出も漸次増加するようになった。また第三表には一八六六〜六七年以前についての日本系の再輸出量が記載されており、一八五八〜五九年、つまり開港以前にすでに日本系四五五梱が上海にもたらされ、再輸出されていたことが知られる。日本の生糸輸出量と上海の日本系再輸出量を比較すると、一八六〇〜六一年から一八六三〜六四年までは六八〜七八パーセントが上海から再輸出されていた。一八六四〜六五年以降になるとその比率は逆に極端に高くなるが、日本から上海に輸送

第3表 上海生糸輸出先国別表

(単位：梱)

年	イギリス	フランス	アメリカ	その他	総計	うち
						再輸出の 日本糸
1858~59	75,648 (87.9) [%]	7,996 (9.3) [%]	2,448 (2.8) [%]	—	86,092	455
1859~60	61,085 (89.9)	5,343 (7.9)	1,468 (2.2)	—	67,946	4,482
1860~61	73,894 (86.0)	7,993 (9.3)	1,564 (1.8)	2,449	85,900	8,642
1861~62	66,263 (86.7)	6,282 (8.2)	347 (0.5)	3,550	76,442	8,132
1862~63	57,082 (80.7)	10,802 (15.3)	663 (0.9)	2,151	70,698	19,358
1863~64	32,322 (83.8)	3,458 (9.0)	519 (1.3)	2,254	38,553	11,678
1864~65	38,923 (75.2)	10,814 (20.9)	141 (0.3)	1,872	51,750	16,306
1865~66	35,311 (77.8)	8,909 (19.6)	87 (0.2)	1,079	45,386	11,866
1866~67	35,000 (76.9)	9,563 (21.0)	94 (0.2)	869	45,526	13,825
1867~68	31,511 (76.3)	8,260 (20.0)	293 (0.7)	1,211	41,275	—
1868~69	34,506 (73.8)	10,606 (22.7)	863 (1.8)	751	46,726	—
1869~70	31,812 (74.5)	10,005 (23.4)	585 (1.4)	298	42,700	—
1870~71	25,148 (74.8)	6,282 (18.7)	1,939 (5.8)	240	33,609	—
1871~72	35,326 (70.1)	9,981 (19.8)	2,928 (5.8)	2,147	50,382	—
1872~73	38,010 (67.5)	10,795 (19.2)	3,921 (7.0)	3,582	56,308	—

(資料) 1858~59—1865~66: Holdsworth Silk Circular, Shanghai, 4 July 1866, in *JMA* C1/46. 1866~67: *ibid.*, 4 July 1867, in *JMA* C1/46. 1867~68: Jardine, Matheson & Co's [General Circular], Shanghai, 5 June 1868, in *JMA* C1/72. 1868~69—1870~71: Shanghai Price Current and Market Report, No.138, Shanghai, 2 June 1871, in *JMA* C1/74. 1871~72: *ibid.*, No.164, 1 June 1872, in *JMA* C1/75. 1872~73: *ibid.*, No.191, 14 June 1873, in *JMA* C1/76.

(註) 1) 年は7月1日より翌年6月30日。但し、1867~68年以降は6月1日より5月30日。2) その他は香港、ボンベイなど。1868~69年以降はスエズ及び英仏を除くヨーロッパを含む。3) 1858~59年より1866~67年までは撚糸及び粗糸を含む。4) 1859~60年の計は不一致であるがそのままとした。5) 1868~69年を以降の総計には再輸出の日本糸は含まれない。6) 1871~72年は新糸220梱を含む。

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

第4表 マルセイユ港入荷生糸量

(単位：梱)

年	ペルシャ	ベンガル	中 国	日 本	その他	計
1859	6,010 (37.4)	1,250 (7.8)	7,600 (47.3)	—	1,200	16,060
1860	7,100 (44.8)	308 (1.9)	7,200 (45.4)	—	1,250	15,858
1861	—	—	—	—	—	13,088
1862	4,950 (31.2)	520 (3.3)	9,120 (57.5)	—	1,261	15,851
1863	6,830 (27.8)	1,710 (7.0)	13,921 (56.8)	—	2,066	24,527
1864	5,870 (38.3)	880 (5.7)	7,120 (46.5)	—	1,450	15,320
1865	5,944 (15.3)	3,741 (9.6)	27,134 (69.8)	—	2,063	38,882
1870	1,750 (5.7)	2,184 (7.1)	24,951 (81.1)	—	1,864	30,749
1871	910 (3.9)	429 (1.8)	18,987 (81.6)	—	2,946	23,272
1872	898 (3.4)	987 (3.7)	22,622 (84.4)	—	2,291	26,798

(資料) 1859, 60: Arlès-Dufour & Cie [Silk Circular], Lyons, 11 Jan. 1861, in *JMA* C1/41. 1861: Rosenburger & Cie. Silk Circular, Marseille, 4 Jan. 1862, in *JMA* C1/41. 1862~64: Arlès-Dufour & Co. [Silk Circular], 11 Jan. 1865, in *JMA* C1/41. 1865: *ibid.*, 11 Jan. 1866, in *JMA* C1/41. 1870~72: *ibid.*, 10 Jan. 1873, in *JMA* C1/41.

された生糸の大部分は陸揚げされることはなかった。⁽²¹⁾ 上海における生糸総輸出量に対する日本系の割合は、一八六〇〜六一年及び一八六一〜六二年は約一〇パーセント、一八六二〜六三年から一八六六〜六七年にかけては二六〜三二パーセントであった。

第二表でみたように、一八六五年のフランス帝国郵船会社による上海―横浜航路の開設、さらには一八六九年のスエズ運河の開通によって日本からのマルセイユ向生糸輸出は増大したが、この統計から単純に「直接消費地に近い港に積出されることになった」⁽²²⁾ という結論をひきだすことができるだろうか。

第四表は一八五九〜一八六五年及び一八七〇〜一八七二年におけるマルセイユ港入荷生糸量を示している。マルセイユに入荷した生糸の大部分はアジア系で、六〇年代前半期には輸入生糸の八〇パーセント以上は中国、日本及びペルシャからの輸入でしめられていた。一八六五年になると輸入生糸量は前年の二倍以上に増加するが、これは中国系及び日本系輸入の激増の結果であり、生糸入荷量の約七〇パーセントがこの二国からの輸入でしめられ、その比率は七〇年代初期には八〇パーセント以上となった。しかし、日本及び中国からマルセイユに輸出された生糸は、同港で陸揚げされたわけではなかった。⁽²³⁾

『英国領事報告』によると、日本からフランス向に輸出された生糸には“Marseilles optional” というラベルが貼られ、最終仕向地未定のまま単に仮仕向地としてマルセイユに輸出されたにすぎず、マルセイユからさらにロンドンあるいはリヨンに輸送された。⁽²⁴⁾ マルセイユからロンドンに再輸出された生糸数量を確定することは不可能であるが、次の資料から類推されるように一八八〇年頃までは大量の生糸がマルセイユからロンドンに、それもほぼ独占的にイギリス船舶によって再輸出されていたと考えられる。⁽²⁵⁾ 一八八四年の『英国領事報告』には次のように記されている。⁽²⁶⁾

「イギリスへの輸出（マルセイユへ積出された）と記されている生糸の少なからざる量が、大陸の市場ではなく、最終的にはロンドンに輸送されていることは記憶にとどめられなければならないが）は確実に減少している。生糸の積出量は一八七六年の一〇、二八七捆、一八七七年の九、九二八捆から一八八三年には四、一〇四捆に減少し、一八八四、八五年度には僅か二〇八捆にすぎなくなった。」（傍点―引用者）

註

(1) 山口和雄、前掲書、一三頁、及び石井孝、前掲書、五五―五六頁。荒居英次氏は『英国領事報告』にも同じき新

たに幕末貿易額を推定されているが、『英国領事報告』の統計自体、以上の欠点を免れているわけではない（荒居英次『近世海産物貿易史の研究』、吉川弘文館、一九七五年、五七一―五八七頁）。

(2) 同書、第七一表、五六〇頁。

(3) 同右、二八四、三七〇、三七一、三七二、三七五、五〇五、五一二、五一六、五一九頁。

(4) 一八六八―六九年までの統計は、Report by Mr. Adams on the Central Silk Districts of Japan (1870), p. 17 (BPP, JAPAN, Vol. 2, p. 545) に掲載されており、『横浜市史』第二巻にも引用されている（三七八及び五二二頁）。

(5) 『横浜市史』第二巻、五五〇頁。

(6) M. Paske-Smith, *Western Barbarians in Japan and Formosa in Tokugawa Days* (Kobe: J. L. Thomson, 1930), p. 215.

(7) Circular は各商会が市況報告として発行するもので、取扱商品の相場表をはじめフレイト、その他関連のある情報が記載されているのが普通である。発行部数は商会の規模にもより異なるが、オーグスチン・ハード商会 Augustine Heard & Co. は一八六三年に一九九通の Circular をはは全世界に送付している (S. C. Lockwood, *Augustine Heard and Company, 1858-1862*, Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1971, p. 18)。

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

英米両国の領事報告は、これらの Circular にもとづいて作成されている。これに関してプラットは次のように述べている。「一般的にいえば、大部分の製造業者や貿易商は領事報告には何ら重要性を求めなかった。彼等は自分達の支店や代理店、あるいはイギリスの海外にある銀行、保険及び電信会社の広範囲にわたるネットワークを通して自らの情報源をもつた」(D. C. M. Platt, *Finance, Trade, and Politics in British Foreign Policy 1815-1914*, Oxford: Clarendon Press, 1968, p. 114)。

(8) 第一号の発行については資料上の制約のため明らかではない(一八六七年二月頃と推定される)が、月二回ほぼ二週間毎に発行されている。横浜外国人商業会議所は一八六四年二月に発足した(M. Paske-Smith, *op. cit.*, p. 219)。

(9) 第二表をパスケスミスの統計と比較すると若干の相違があり、中でも一八六四〜六五年のアメリカ向輸出は二〇五梱とされているが、いかなる資料によっても立証することはできず、誤植ではないかと思われる。第二表によれば同じ二〇五梱が前年度一八六三〜六四年にフランスに輸出されており、また『米國領事報告』によれば、一八六四〜六五年に二〇五梱が香港に輸出されている(G. S. Fisher to W. H. Seward, 9 Oct. 1865, in *Despatches from U. S. Consuls in Kanagawa 1861-1897*, Vol. 2, The National Archives, 1948, FM No. 135)。興味深

いことに藤本実也『開港と生糸貿易』中巻(刀江書院、一九三九年)でもこの点が言及されている(三九八頁)。

(10) M. Paske-Smith, *op. cit.*, p. 215.

(11) フランスの対日政策については Meron Medzini, *French Policy in Japan during the closing Years of the Tokugawa Regime* (Cambridge, Mass.: Harvard University, 1971), R. L. Sims, 'French Policy towards Japan, 1854-1894' (Unpublished Ph. D. thesis, Univ. of London, 1968), Jean-Pierre Lehmann, 'France and Japan 1850-1885' (Unpublished Ph. D. thesis, Univ. of Oxford, 1975) 石井孝『増訂明治維新の国際的環境』(吉川弘文館、一九七三年)、六一五〜六五八頁、柴田三千雄、柴田朝子「幕末におけるフランスの対日政策」(『史学雑誌』第七六編第八号、一九六七年)を参照。

(12) 石井孝、『幕末貿易史の研究』、二〇九頁。

(13) 山口和雄、前掲書、三二頁、石井孝、『幕末貿易史の研究』、二〇六頁、及び『横浜市史』第二巻、五七二頁。

(14) ロンドン・サザンプトン間は約八〇マイル(一二八キロメートル)であり、英國領事パスケスミスがロンドンとサザンプトンとを混同するとは考えられない。いくつかの Circular では仕向地はロンドンと記載されており、おそらく彼の依拠した資料ではロンドンになっていたと思われる。P & O 汽船会社はスエズ運河の開通によって、最

- 終港をサセンプトンからロンドンに変更するのを余儀なくされたこと (B. Cable, *A Hundred Year History of the P. & O., 1837-1937*, London: Nicholson & Watson, 1937, pp. 166-167)。
- (15) G. S. Fisher to W. H. Seward, 9 Oct. 1865.
- (16) Holdsworth's Silk Circular, Shanghai, 4 July 1866, in *JMA* C1/46. *CR 1866*, Shanghai, p. 105 (*BPP, CHINA*, Vol. 7, p. 369) 参照。
- (17) 『横浜市史』第二巻 五十三頁。
- (18) 『横浜市史』資料編1 (『日本貿易統計』) 一六五頁。
- (19) G. S. Fisher to W. H. Seward, 1 Oct. 1862 及び 1 Oct. 1863 及び in *Despatches from U. S. Consuls in Kanagawa 1861-1897*, Vol. 1. *CR 1864*, Shanghai, p. 88 (*BPP, CHINA*, Vol. 6, p. 578).
- (20) Holdsworth's Silk Circular, Shanghai, 4 July 1866 及び 4 July 1867, in *JMA* C1/46.
- (21) *CR 1865*, Shanghai, p. 130 (*BPP, CHINA*, Vol. 7, p. 656).
- (22) 『横浜市史』第二巻 五十三頁。
- (23) *CR 1865*, Shanghai, p. 140 (*BPP, CHINA*, Vol. 7, p. 666).
- (24) *CR 1880*, Kanagawa, p. 41 (*BPP, JAPAN*, Vol. 6, p. 705), *CR 1881*, Kanagawa, p. 36 (*ibid.*, Vol. 7, p. 48), *CR 1883*, Kanagawa, p. 13 (*ibid.*, Vol. 7, p.

181).

- (25) 一八六六年までについては、イギリスの貿易統計によりフランスからの生糸輸出货量とイギリス船舶による輸送量を知ることができ、ほぼ一〇〇パーセントがイギリス船舶によつて輸送された (*Annual Statement of the Trade and Navigation, 1860-67*各年)。
- (26) General Report on the Trade of Japan for the Year 1884, p. 106 (*BPP, JAPAN*, Vol. 7, p. 490).

三、ロンドン・リヨン生糸市場の構造

一九世紀半ばにおける生糸世界市場の中心はロンドンで、中
 国及び日本から輸出された生糸はロンドンに集荷され、そこか
 らフランスをはじめとするヨーロッパの絹織物機業地に輸送さ
 れた。⁽¹⁾ 当時生糸の最大消費国はフランスで、生糸消費高は一八
 四〇年代以降急速に増大し、一八四四年の一三六万キログラム
 から一八五四年には二三八万キログラム、一八六四年には三五
 一万キログラムに達した。⁽²⁾ 一八四〇年にフランスに発生した微
 粒子病は、フランス国内から次第にイタリアにまで拡大し、そ
 の流行は一八五二年に最も激しく、⁽³⁾ フランスの繭産額は一八五
 三年の二、六〇〇万キログラムから急減して、一八六五年には

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

第5表 フランス生糸輸入量 (単位：1,000kg)

	1867	1868	1869
生糸			
イギリス	1,143(49.3) [%]	1,367(53.5) [%]	1,230(51.4)
イタリア	236(10.2)	209(8.2)	248(10.4)
トルコ	315(13.6)	323(12.6)	277(11.6)
中国	307(13.2)	489(19.1)	510(21.3)
その他	317(13.7)	168(6.6)	128(5.3)
計	2,318	2,555	2,393
撚糸			
イギリス	52(5.3)	58(6.6)	52(3.9)
イタリア	882(89.5)	776(87.9)	1,253(93.4)
スイス	52(5.3)	49(5.5)	36(2.7)
計	986	883	1,341
屑糸			
イギリス	150(10.3)	93(5.4)	133(6.7)
イタリア	784(53.9)	1,033(59.5)	1,282(65.0)
スイス	334(23.0)	395(22.8)	415(21.1)
計	1,454	1,735	1,971

(資料) *The Silk Supply Journal*, Vol.1, No.6, June 1870, p.93.

(註) 屑糸の計は不一致であるがそのままとした。

イギリスから、また一〇パーセントはイタリア、一三パーセントはトルコ、二〇パーセント前後は中国から各々輸入されていた。もちろん後に検討するようにイギリスからの輸入糸の大部分はアジア糸であり、また中国からの輸入の中には当然日本糸も含まれていると考えられる。撚糸は九〇パーセント前後がイタリアから輸入され、また屑糸も六〇パーセント近くがイタリアから輸入されていた。

イギリスの貿易統計に関しては通常『英国議会資料』中の *Annual Statement of the Trade and Navigation of the United Kingdom with Foreign Countries and British Possessions* ⁽⁷⁾ が利用されているが、

僅か五五〇万キログラムになった。⁽⁴⁾ こうしてフランスは自国での需要に應ずるだけの生糸を国内で生産することができず、輸入原料糸への依存が決定的になり、⁽⁵⁾ 一八六〇年代初期にはアジア糸のヨーロッパ諸国への輸入が著しく増加した。⁽⁶⁾

第五表は一八六七〜六九年におけるフランスの生糸、撚糸及び屑糸の国別輸入量を示している。生糸の約五〇パーセントは

一八七三年以前についての生糸輸入統計では、最終積出地にしたがって記載されているため、中国糸、日本糸とも大部分がフランス及びエジプトよりの輸入と見なされており、ロンドン生糸市場の構造を分析するうえではほとんど役にたたない。⁽⁸⁾

第六表は一八三一〜五六年におけるイギリスの国別年平均生糸輸入量を、また第七表は一八五七〜七二年における輸入生糸

第6表 イギリス生糸輸入量 (括弧内は%)

(単位: 1,000 ポンド)

	中 国	ベンガル	ペルシャ	ブルチア	イタリア	計
1831~35年平均	755 (23.9)	971 (30.8)	109 (3.5)	301 (9.5)	1,020 (32.3)	3,156
1836~40 "	923 (24.1)	1,221 (31.9)	145 (3.8)	405 (10.6)	1,129 (29.5)	3,823
1841~45 "	483 (12.2)	1,444 (36.6)	142 (3.6)	548 (13.9)	1,326 (33.6)	3,943
1846~50 "	2,035 (44.9)	1,243 (27.4)	147 (3.2)	307 (6.8)	798 (17.6)	4,530
1851~56 "	4,091 (63.7)	1,523 (23.7)	212 (3.3)	127 (2.0)	467 (7.3)	6,420

(資料) Durant & Co's Circular, 1 Jan. 1874, in JMA C1/42.

- (註) (1) 原表の梱表示を、1 梱当り平均純量中国糸 103 ポンド、ベンガル糸 150 ポンド、ペルシャ糸 75 ポンド、ブルチア糸 170 ポンド (1842 年以降 200 ポンド)、イタリア糸 250 ポンド (1839 年以降 280 ポンド) として換算し、以上 5 地域からの合計をもって計とした。
- (2) リバプールにおける輸入も含まれている。
- (3) 1841 年以降の中国糸には広東糸も含まれている。
- (4) ベンガル糸は 1839 年以前は Company's と Private の合計、1840 年以降は Private のみである。
- (5) 撚糸は除かれている。

の国別内訳を示したものである。イギリスへの生糸輸入量は一八三二年以降次第に増加していたが、中でも中国糸の輸入量は一八四五年以降急増⁽⁹⁾し、一八五九年に日本糸が輸入される直前には、ロンドン生糸市場の七〇〜八〇パーセントは中国糸で、また一五パーセント内外はベンガル糸でしめられていた。一八五九年に日本糸が初めてイギリスにもたらされたとき⁽¹⁰⁾、日本糸は中国糸、ベンガル糸に比較して良質であったところから非常に歓迎され、一般的な好奇心を呼び起した⁽¹¹⁾。日本糸の輸入量は、一八五九年の五・五万ポンドから翌六〇年には六四・七万ポンド、六二年には九七・六万ポンド、六三年には最高の二二九・四万ポンドに増加し、二七パーセントのシェアをしめるにいたった。日本糸に関して小さな切断個所^{フレイグス}の多いことはすでに一八六〇年に指摘され⁽¹²⁾おり、日本糸輸入は数量的には増加していったものの、品質については最初の予想に反することが次第に明らかになり、それとともに価格も低落した⁽¹³⁾。事実、後述するように、日本糸の最高価格は一八六〇年の三一シリングから六二年には二四シリングに下落した。とくに繰糸工程での不注意によるサ

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

第7表 イギリス生糸輸入量 (括弧内は%)

(単位：1,000 ポンド)

年	中国うち			日本	ベンガル	イタリア	その他	総計	
	七里糸	大蚕糸	広東糸						
1857	8,537(81)	4,274	3,712	551	—	1,354(13)	403(4)	231	10,525
1858	4,516(72)	3,183	1,150	183	—	1,162(18)	498(8)	107	6,283
1859	7,175(80)	4,853	2,134	189	55(1)	1,252(14)	363(4)	171	9,015
1860	6,479(73)	4,566	1,731	182	647(7)	1,268(14)	233(3)	200	8,827
1861	6,125(75)	3,782	2,151	192	744(9)	900(11)	322(4)	109	8,200
1862	6,766(73)	4,167	2,343	255	976(11)	921(10)	290(3)	338	9,291
1863	4,395(52)	3,086	1,075	234	2,294(27)	1,108(13)	497(6)	195	8,488
1864	2,566(46)	1,966	487	113	1,170(21)	1,148(21)	375(7)	276	5,534
1865	3,881(58)	2,396	1,141	344	1,179(18)	1,347(20)	117(2)	208	6,732
1866	2,612(55)	1,550	508	554	741(15)	1,257(26)	114(2)	60	4,784
1867	3,381(63)	2,289	608	483	698(13)	1,126(21)	67(1)	55	5,326
1868	4,590(70)	3,135	881	574	851(13)	924(14)	139(2)	19	6,522
1869	3,065(64)	2,130	373	561	875(18)	727(15)	97(2)	20	4,784
1870	4,438(70)	2,337	752	1,349	763(12)	837(13)	191(3)	103	6,331
1871	5,150(68)	3,130	602	1,418	1,077(14)	1,056(14)	200(3)	115	7,598
1872	5,063(75)	2,811	636	1,369	857(13)	674(10)	120(2)	79	6,792

(資料) H. W. Eaton & Sons' Circular, London, 1 Jan. 1873, Table A, in JMA C1/41.

(註) 1) 四捨五入のため総計は必ずしも一致しない。2) 撚糸は除かれている。

イブの不均一や括造の不完全が欠点として指摘され、日本糸に対する評価は輸入開始後二、三年で早くも失なわれてしまっていた。

一八六〇年代前半期にはロンドン生糸市場の大部分は中国糸、ベンガル糸及び日本糸でしめられ、中でも七里糸及び大蚕糸を主とする中国糸が絶対的優位性を確立していた。⁽¹⁵⁾ 中国糸の品質は悪く、次第に「忌み嫌われる」⁽¹⁶⁾ ほどになり、さらに太平天国の乱による生産の縮小に影響されて、輸入量も一八六二年の六七六・六万ポンドから六三年四三九・五万ポンド、六四年には二五六・六万ポンドに激減し、シェアも五〇パーセントを割るにいたった。一八六三年における日本糸の急増は、こうした中国糸の品質低下と輸入量の減少を背景にしてはじめて可能であり、中国糸の「不足分は多量に日本から供給され」、⁽¹⁷⁾ 「日本糸は引き続き主要な取引商品」⁽¹⁸⁾ でありえたのである。ロンドン生糸市場における日本糸市場の拡大は欧州糸、中国糸及びベンガル糸と

の競争力にかかっていたが、欧州系の生産が徐々に回復し、価格も低廉になるにつれて、アジア系の消費は全体的に制限されていった。⁽¹⁹⁾ さらに一八六四年の「未曾有の予期せぬヨーロッパにおける繭産の不作」は、同時に緯糸として用いられる中国糸及び日本糸輸入の増進をも阻止する作用をはたした。⁽²⁰⁾

一八六〇年代後半期になるとイギリスに輸入される生糸量は、一八六〇と一八六四年平均の八〇七万ポンドから五六三万ポンドに減少したが、中国糸の輸入量が漸増したために、日本糸の市場は制限され、輸入量も増加しなかった。⁽²¹⁾ 六〇年代後半期から七〇年代初期における各輸入糸のシェアは中国糸五五と七五パーセント、日本糸一二と一八パーセント、ベンガル糸一〇と二六パーセントで、中国糸シェアの回復に対して、日本糸及びベンガル糸のシェアは、スエズ運河の開通によりアジア系相互間の競争が激しくなり、⁽²²⁾ さらにまた欧州糸とも以前にもまして直接競争するようになったために、むしろ逆に停滞ないしは減少の傾向にあった。

日本糸の輸入量は一八六三年に急増して以降数量的にも、またシェアのうえでも停滞的であったが、日本糸の粗製濫造はいっそうに矯正されず、そのために市場拡大の可能性はきわめて制限され、ただ中国糸の供給不足や品質低下あるいはヨーロッパ

パ繭生産の不作などの条件の下でのみロンドン市場における位置を確保しえたにすぎなかった。一八六〇年後半期には緯糸技術の稚拙さと良質蚕卵紙の大量輸出の結果、日本糸の品質低下は次第に著しくなり、⁽²⁴⁾ 「日本糸の品質に関する不満は一八六八年に大きく、翌六九年にはさらに一層大きくなり」、⁽²⁵⁾ 七〇年には「品質低下は以前にもまして顕著」で、⁽²⁶⁾ 大部分の日本糸はサイズの不均一が著しく、屑糸として販売される以外になかった。⁽²⁷⁾

当時輸出された日本糸の大部分は提糸で、⁽²⁸⁾ 上質糸に対する需要は継続して活発であったが、⁽²⁹⁾ 中国糸も日本糸と同様の用途に用いられたために、日本糸は次第に中国糸によって代替されるようになり、⁽³⁰⁾ ほとんど常時無視されるという状態で、⁽³¹⁾ とくに中下等日本糸の販売は困難となり、ストックは大量になった。⁽³²⁾

次にロンドン市場における輸入糸の価格動向を検討しよう。第八表は一八六〇年から一八七四年における中国糸（七里糸、大蚕糸及び広東糸）、日本糸、ベンガル糸及びイタリア糸の最高価格と最低価格を示している。ロンドンにおける生糸相場は *Economist* 掲載の *Weekly Price Current* で知ることができ、日本糸相場があらわれるのは一八七四年三月二一日号（一五九五号）以降であり、第八表の数字とも若干の差異がみ

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

第8表 ロンドン市場生糸価格（1ポンド当り）（単位：シリング、ペンス）

年	中 国						日 本		ベンガル		イタリヤ	
	七里糸		大蚕糸		広東糸		s. d.					
1860	19.0~26.0	13.9~22.0	6.0~19.0	15.0~31.0	12.0~28.6	32.0~41.0						
1861	15.6~25.0	11.3~20.6	6.0~19.0	12.0~30.0	9.0~25.6	21.0~35.0						
1862	16.0~22.0	11.3~16.6	8.0~17.0	13.0~24.0	9.0~21.0	21.0~28.0						
1863	18.6~26.0	15.0~22.0	8.0~18.0	13.0~27.0	9.6~23.0	23.0~31.6						
1864	18.0~27.0	17.0~24.6	12.0~23.9	13.0~28.0	11.0~25.0	23.0~34.0						
1865	23.0~27.0	18.0~24.0	18.0~22.0	18.0~28.6	16.0~25.0	31.0~34.0						
1867	20.0~33.6	15.0~29.0	15.6~25.6	7.0~35.6	12.0~31.0	35.0~43.0						
1868	18.6~32.6	18.0~25.6	14.6~22.6	7.0~39.0	13.0~32.6	37.0~53.0						
1869	20.0~28.6	18.6~24.6	15.6~22.6	7.0~38.0	13.0~31.0	44.0~50.0						
1871	22.0~31.6	17.0~27.0	11.0~23.0	21.0~32.0	10.0~27.0	24.0~37.0						
1872	21.6~31.6	18.0~27.6	14.0~23.6	19.0~30.0	10.0~29.0	28.0~38.0						
1873	14.6~31.0	12.0~26.6	13.0~22.6	10.0~30.0	9.6~27.0	30.0~38.0						
1874	14.0~24.6	10.0~20.0	12.9~17.6	10.0~26.0	9.0~23.0	28.0~32.0						

(資料) 1860~62: Eaton's Circular, London, 3 Jan. 1862, in *JMA* C1/41.
 1863~65: *ibid.*, 6 Jan. 1865, in *JMA* C1/41. 1867~69: H. W. Eaton & Sons' Circular, London, 4 Jan. 1869, in *JMA* C1/40. 1871-72: *ibid.*, 4 Jan. 1873, in *JMA* C1/41, 1873~74: *ibid.*, 5 Jan. 1874, in *JMA* C1/41.

(註) 1862, 65, 69, 74 年は各年1月1日の価格。

られるので、利用しなかった。

日本糸に関して顕著なことは最高価格と最低価格との価格差が、中国糸及びベンガル糸に比較して大きいことである。このことは日本糸の場合上質糸から下等糸にいたるまで広範囲にわたる品質の生糸が輸入されていたことを物語っている。それとともに、この価格差拡大の傾向は一八六七と六九年に非常に著しく、最低価格が七シリングであるのに対して最高価格は三五シリング六ペンスと三九シリングで、粗製濫造による品質低下によって価格も下落していたことがわかる。

イタリヤ糸価格は一貫して著しく高く、この点は後に検討するリヨン市場の価格動向とは異なっている。中国糸、ベンガル糸及び日本糸各々の平均価格をみると、日本糸は一八六〇年代を通じて二〇シリング前後で、一八六

第9表 リヨン市場生糸価格（1キログラム当り）

（単位：フラン）

年	中 国			日 本	バ ン ガ ル	イ タ リ ヤ	
	七里糸 No.3	七里糸 No.4	嘉興糸 No.2 & 3				前橋一 番 (10/16デニール)
1860	—	65~67	56~60	—	—	70~73	82~84
1861	—	52~55	40~44	—	—	53~58	58~63
1862	—	63~66	53~55	73~77	—	60~69	74~77
1863	63~66	63~66	57~63	70~74	65~67	57~63	62~68
1864	73~76	73~76	69~71	81~84	—	72~76	83~87
1865	87~90	81~83	76~79	102~106	93~94	90~93	100~106
1866	90~91	82~84	76~82	104~106	94~106	90~92	92~101
1867	79~82	70~73	64~69	99~104	84~88	74~80	92~102
1868	78~82	66~68	60~65	100~106	98~101	74~84	100~118
1869	82~85	70~72	62~67	88~98	100~103	75~82	80~110
1870	79~81	71~73	57~65	72~75	83~85	60~70	74~88
1871	80~83	72~74	62~72	75~78	86~89	60~70	85~105
1872	79~81	69~71	60~66	76~79	81~83	64~73	92~106
1873	—	52~54	44~48	70~74	—	57~62	80~90
1874	—	42~43	34~37	53~55	—	40~42	60~70
1875	—	42~43	36~40	44~45	—	30~36	56~60
1876	—	71~73	57~62	88~91	—	73~78	100~105
1877	—	52~53	44~49	59~60	—	52~56	74~78
1878	—	42~44	39~41	48~49	—	37~40	56~58
1879	—	45~47	40~42	56~58	—	50~51	66~68

（資料） 1860~64: Arlés-Dufour & Co. [Silk Circular], Lyons, 17 Jan. 1874, in *JMA* C1/41. 1865~79:

ibid., 9 Jan. 1880, in *JMA* C1/43. 但し、七里糸 No.3 及び奥州エクストラに関しては ibid., 10 Jan. 1873,

in *JMA* C1/41.

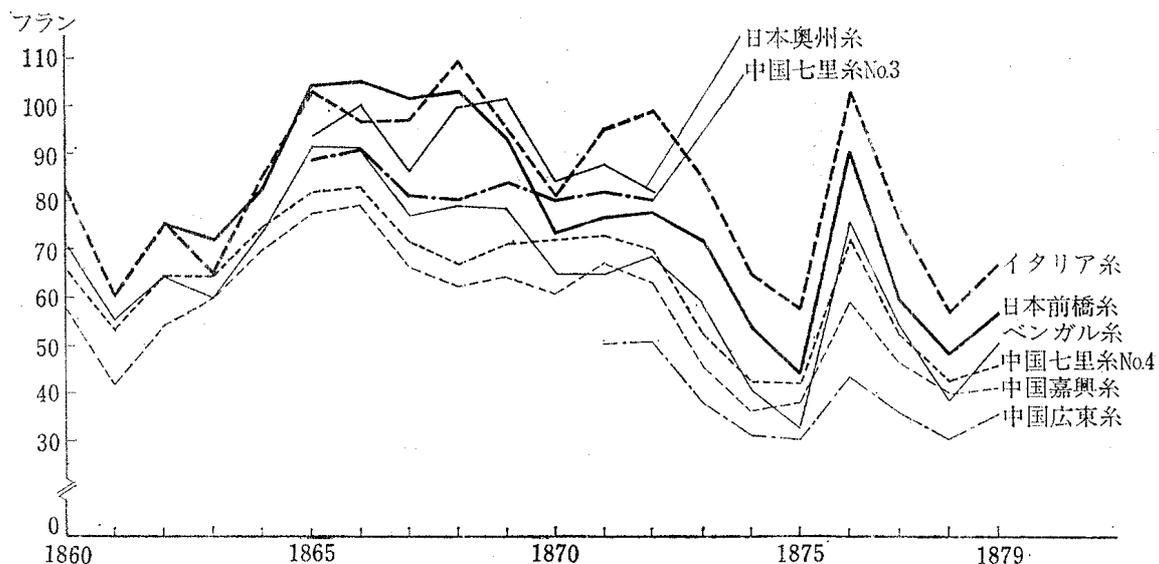
（註） 各年12月31日の価格。

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

二年以降七三年まで継続して中国七里系の下位にあり、七一年を別にすればその差は一ポンド当り一シリング九ペンスと五シリング六ペンスであった。とくに一八六七と六九年には日本系平均価格は二一シリング三ペンスと二二シリング六ペンスで、中国大蚕系、ベンガル系と同価格にあり、品質低下とその結果としての価格下落によって大蚕系、ベンガル系との競争にさらされていた。七〇年代に入ると日本系価格はやや上昇し、中国七里系と大蚕系とのほぼ中間になった。このようにロンドン市場における日本系は中国系及びベンガル系との競合関係におかれており、市場拡大はいうに及ばず、シェアの確保さえ困難な状態にあった。

リヨン市場における価格動向は、ロンドン市場よりさらに詳細にかつ長期にわたり知ることができる。第九表は、一八六〇年から七九年にいたる二〇年間における中国七里系(三等及び四等)⁽³³⁾、中国嘉興系(二等及び三等)⁽³⁴⁾及び広東七里系(四等)⁽³⁴⁾、日本系前橋一番(一〇と一六デニール)⁽³⁵⁾及び奥州エクストラ(一四と二二デニール)、ベンガル系(一等、一二と一六デニール)、それにイタリア系(一等及び二等、一一と一三デニール)⁽³⁶⁾の各年一二月三十一日における最高価格と最低価格を示している。また第一図はそれらの平均価格を明示したものである。

第1図 リヨン市場生糸平均価格(1キログラム当り)



(資料) 第9表より作成。

リヨン市場における価格の動向は一八六一～六五年には上昇の傾向にあるが、六五年を境にして下降に転じ、七二年前後までは漸減、それ以降七五年までは急落している。一八七六年の価格はヨーロッパにおける繭生産の凶作を反映して、前年に比して一時的に約二倍になったが、その後また下落している。一八六二年に初めて知られる前橋一番の相場は七三～七七フランでイタリア糸（七四～七七フラン）と同様最も高価な生糸であり、六三年以降も六四年を除いて六七年までイタリア糸をおさえて最高相場を維持していた。六八年以降になると粗製濫造による品質低下を反映して価格は急落したが、それでも七九年にいたるまでイタリア糸に次ぐ位置を確保していた。また奥州エクストラの相場は、一八六三年には六五～六七フランで七里糸を僅かに上回る程度であったが、六五年には九三～九四フランに急騰して前橋一番、イタリア糸に次ぐ位置をしめ、翌六六年になるとイタリア糸価格より高相場で取引され、六九、七〇年両年の平均価格はイタリア糸、前橋一番をも凌ぎ、七二年までは前橋一番よりも高価格であった。

一八六〇年前半期における各輸入糸の価格差は比較的少なく、輸入糸は相互に競合関係にあったといえる。六〇年代後半期になると価格差は次第に拡大し、日本糸はイタリア糸とはば

同価格で競合関係にあったが、前橋一番の場合、ロンドン市場と同様、品質低下は価格下落を引き起し、新たに中国糸、ベンガル糸との競争にさらされていた。七〇年代における価格動向は、ベンガル糸を除いて並行して変動しており、市場は比較的安定していたといえる。

註

- (1) 今西直次郎『欧米蚕糸業視察復命書』（一九〇二年）、五二頁。「ロンドンには常に『極東』からのあらゆる輸出品の集散地であった」(CR 1865, Shanghai, p. 137 [BPP, CHINA, Vol. 7, p. 663])。
- (2) 農商務省農務局『伊仏之蚕糸業』（一九一六年）、一二一頁。
- (3) 同右、一四頁。
- (4) 同右、五五～五六頁。松原建彦『フランス近代養蚕業の発展過程』（福岡大学経済学論叢）第一九卷二・三合併号、一九七四年）、三八四頁。
- (5) 服部春彦『十九世紀フランス絹工業の発達と世界市場』（『史林』第五四卷第三号、一九七一年）、一〇頁。フランス絹織物業は、原料市場、絹織物販売市場双方の点で、世界の諸事件に敏感に反応せざるをえなかった (Tom Kemp, *Economic Forces in French History*, London: Dennis Dobson, 1971, p. 185)。

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

- (9) Durant & Co's Circular, Cophall Court, [London], 4 Jan. 1861, in *JMA* C1/41.
- (7) 一八七二年以降 *Annual Statement of the Trade of the United Kingdom*... による。
- (8) イギリスにおいては生糸生産はほとんど行なわれなかったもので、ロンドン生糸市場は輸入生糸で構成されていた。イギリスにおける絹工業については F. O. Howitt, 'Silk-An Historical Survey with special reference to the Past Century', *Journal of the Textile Institute*, Vol. 42, No. 8, 1951 を参照。
- (6) Durant & Co's Circular, 1 Jan. 1874, in *JMA* C1/42.
- (10) 初めて輸出された日本糸は忽代糸（一四〜一八デニール）といわれ（澳國博覽會事務局『日本生糸ノ説』平山成一郎訳、一八七三年、国立国会図書館蔵、一丁）、パスケ＝スミスによれば一八五九年の日本糸ロンドン入荷量は六一〇梱、価格は一六シリング六ペンス〜二七シリングであった（M. Paske-Smith 'op. cit.', p. 216）。
- (11) *CR 1862*, Kanagawa, p. 209 (*BPP, JAPAN*, Vol. 4, p. 46)。
- (12) Durant & Co's Circular, 4 Jan. 1861, in *JMA* C1/41.
- (13) Ibid., 4 Jan. 1862, 1 Jan. 1863, in *JMA* C1/41.
- (14) Ibid., 1 Jan. 1863, in *JMA* C1/41. Eaton's Circular, London, 3 Jan. 1862, in *JMA* C1/41.
- (15) 七里糸とは一般的に江蘇及び浙江省で生産される座繰糸（*セリ*）の、その他の座繰糸は大蚕糸と呼ばれる。七里糸は二〇〜四〇デニールで需要先は中国国内及びヨーロッパであった（東亜研究所『支那蚕糸業研究』、大阪屋号書店、一九四三年、一二一及び一八三頁）。
- (19) Waithman, Jacomb, & Hogg's Circular, London, 1 Jan. 1864, in *JMA* C1/41.
- (21) Ibid., 1 Jan. 1864, in *JMA* C1/41.
- (18) Durant & Co's Circular, 8 Sept. 1863, in *JMA* C1/41.
- (17) Waithman, Jacomb & Hogg's Circular, 1 Jan. 1864, in *JMA* C1/41.
- (20) Jacomb, Hogg & Co's Circular, London, 3 Jan. 1865, in *JMA* C1/41.
- (22) この背景には、日本国内における生糸生産力が限界に達していたという事実があった。（山口和雄、前掲書、三二頁、『横浜市史』第二巻、五二三頁）。
- (23) J. H. Clapham, *Economic Development of France & Germany* (4th ed.), Cambridge Univ. Press, 1936, p. 253.
- (28) Arlès-Dufour & Co. [Silk Circular], Lyons, 31 July 1869, in *JMA* C1/40. 又 G. C. Allen, *A Short Economic History of Modern Japan* (3rd rev. ed.), London, 1913, p. 100.

- ed.), London: G. Allen & Unwin, 1972, p. 38. G. C. Allen and A. G. Donnithorne, *Western Enterprise in Far Eastern Economic Development*, London: G. Allen & Unwin, 1954, p. 201.
- (24) *CR 1869*, Kanagawa, p. 5 (*BPP, JAPAN*, Vol. 4, p. 393).
- (25) Report by Mr. Adams on the Deterioration of Japanese Silk (1871), p. 3 (*BPP, JAPAN*, Vol. 3, p. 57).
- (26) *Ibid.*
- (27) Report by Mr. Adams on the Central Silk Districts of Japan (1870), pp. 10, 11 (*BPP, JAPAN*, Vol. 2, pp. 538, 539).
- (28) ヨーロッパ市場では提糸は総称して前橋糸と呼ばれていた(藤本実也、前掲書、中巻、三八五頁)。海外市場における日本糸の呼称は国内とは異なっており、Filatures (器械糸)‘ Re-reels (座繰揚返糸)’ Hanks (提糸)’ Kakeda (折返糸)’ Ohshu (鉄砲造)’ Hamatsuki (折返糸)の六種に大別されていた(The Bureau of Commerce and Industry of the Imperial Department of State for Agriculture and Commerce, Japan, *General View of Commerce and Industry in the Empire of Japan*, Paris: M. de Brunhoff, 1900, p. 131)。
- (29) Jacomb, Hogg & Co's Price Current for China Mail, London, 25 Nov. 1867, in *JMA C1/41*.
- (30) *The Silk Supply Journal*, Vol. 1, No. 8, Oct. 1870, p. 136.
- (31) Durant & Co's Circular. 2 Jan. 1871, in *The Silk Supply Journal*, Vol. 1, No. 9, pp. 169, 170.
- (32) H. W. Eaton & Sons' Circular, London, 7 Apr. 1869, in *JMA C1/40*.
- (33) 浙江省産生糸の輸出市場はフランスに限定されていた(東亜研究所、前掲書、一八三頁)。
- (34) 中国糸はフランスで撚糸され、主としてアメリカ向織物で用いされた(Arlès-Dufour & Co. [Silk Circular], 27 Oct. 1862, in *JMA C1/41*)。
- (35) デニールは生糸の大きさ(織度)を示す単位で、一デニールとは四七六メートルが〇・〇五三三グラムである生糸の太さを示す。一般に細糸は一・五デニール未満、中細糸一・五〜一三・五デニール、太糸一三・五〜一七デニール、特太糸一七デニール以上とされている(早川直瀬『生糸と其貿易』〔改版〕、同文館、一九二八年、一一三〜一一四頁)。
- (36) フランス糸については撚糸価格が知られるだけである。

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

第10表 幕末内外糸価比較表

年次	リヨン市場 日本前橋糸 一番 (A)	ロンドン市場 日本前橋糸 二番 (B)	横浜平均 相場 (C)	(C) (A)	(C) (B)
1861 (文久元)	法 73.00	法 66.10	法 31.00	% 42.5	% 46.9
1862 (2)	76.00	77.15	33.67	44.2	43.6
1863 (3)	72.00	67.55	38.03	52.8	57.8
1864 (元治元)	84.00	79.90	41.90	49.9	42.4
1865 (慶応元)	106.00	97.85	51.70	48.8	52.7
1866 (2)	106.00	100.60	62.35	58.8	62.0
1867 (3)	104.00	90.90	63.35	60.9	69.7

(資料) 高橋経済研究所『日本蚕糸業発達史』上巻, 65頁。

(註) 1) (A)及び(B)は農商務省刊(明治16年)『蚕糸貿易概説』31頁第8表により、各年12月31日の価格。

2) (C)は明治5年大蔵省刊『生糸蚕種之説』、『大日本蚕史』280頁所収により、弗単位を法に換算(1弗0.5法)。

四、横浜相場とヨーロッパ相場

開港以降日本糸輸出の増大を可能とした要因とされている日本糸の低廉性については、最初に指摘したように、国際市場における価格の低廉性ととも、横浜売込相場が国際価格に比較して約五〇パーセント低いために、「これに……運賃……その他の諸経費を加えても、なお外国商人の手中に莫大な利益を残すことができた」という議論に発展し、共通の認識になっている。しかし、すでに検討したようにロンドン及びリヨン市場における日本糸の価格は中国糸に比較しても決して低廉というわけではなく、リヨン市場においてはむしろ中国糸よりも終始高価格であった。

従来の議論が依拠しているのは高橋経済研究所『日本蚕糸業発達史』上巻所載のリヨン相場(前橋一番)、ロンドン相場(前橋二番)及び横浜平均売込相場にもとづいて作成された「幕末内外糸価比較表」(第一〇表)である。この内外生糸相場表に記載されているロンドン及びリヨン価格を前掲第八表及び第九表と比較すると、リヨン相場は第九表に一致し、またロンドン相場も、換算の際の為替レートは明らかではないが、前橋二番であることを考慮に入れば妥当な価格であるといえよ

第11表 日本系内外相場表

年 度	横 浜	ロ ン ド ン				リ ョ ン			
	1ピクル 当平均 価格 (1)	1ポンド 当平均 価格 (2)	為替相場 (1ドル 当) (3)	1ピクル 当単価 (4)	(1) (4)	1kg当 平均価格 (5)	為替相場 (1ドル 当) (6)	1ピク ル当 単価 (7)	(1) (7)
	ドル	s.d.	s.d.	ドル	%	フラン	フラン	ドル	%
1860~61	372	18.3	5.2	471	79.0	51	6.50	475	78.3
1861~62	403	19.3	5.1	505	79.8	54	6.40	511	78.9
1862~63	459	21.9	5.1	570	80.5	61	6.40	577	79.5
1863~64	500	23.0	5.0 ¹ / ₂	608	82.2	65	6.35	619	80.8
1864~65	617	26.9	4.9 ⁷ / ₈	740	83.4	75	6.04	751	82.2
1865~66	744	31.3	4.7 ³ / ₄	897	82.9	87	5.855	899	82.8
1866~67	765	31.6	4.7	916	83.5	88	5.775	922	83.0
1867~68	741	29.9	4.5 ⁷ / ₈	884	83.8	83	5.66	887	83.5
1868~69	882	35.0	4.6 ¹ / ₂	1,027	85.9	98	5.765	1,029	85.7
1869~70	847	33.6	4.6 ³ / ₈	986	85.9	93	5.72	984	86.1
1870~71	796	30.9	4.5 ¹ / ₄	924	86.1	86	5.62	926	86.0
1871~72	783	31.0	4.6 ¹ / ₄	914	85.7	87	5.80	908	86.2
1872~73	684	27.3	4.6 ¹ / ₈	806	84.9	78	5.835	809	84.5
1873~74	585	22.9	4.4 ¹ / ₄	697	83.9	64	5.545	699	83.7
1874~75	488	18.9	4.2 ³ / ₄	591	82.6	52	5.348	588	83.0
1875~76	450	16.9	4.0 ³ / ₄	550	81.8	47	5.155	552	81.5

(資料) Review of the Japan Silk Trade from 1874 to 1877, Summary of Commercial Reports by Her Majesty's Consuls in Japan for the Year 1876, pp. 39-41 (BPP, JAPAN, Vol. 6, pp. 245-247).

(註) 1ピクル=133.33ポンド=60.52kg, 1シリング=12ペンス。

う。日本系の中でも高価格である前橋系のヨーロッパ相場と横浜平均売込相場との比較自体適切とはいえないが、ここで問題となるのは横浜平均売込相場の換算についてである。『大日本蚕史』掲載の横浜平均相場は、前掲第一表の一ピクル当り単価とほぼ一致しているが、註にある一ドル〇・五フランで換算しても(C)の数字はえられないのみならず、幕末におけるドル・フランの為替相場は一ドル、六フラン前後であり、さらにまた次にみるように、ロンドン、リヨン及び横浜の単価の重量単位は各々異なっているから、第一〇表自体改めて検討する必要がある。(3)

さきに第一表として利用した『英国領事報告』中の「Review of the Japan Silk Trade from 1874 to

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

1877'には輸出数量、価額、一ピクル当り単価の他に、為替相場、ロンドン及びリヨン市場における日本糸平均販売価格もあわせて記載されている。第一一表はこの資料にもとづいて作成した日本糸の内外相場表である。原表では横浜売込相場については一ピクル当りのドル（メキシコ銀）表示であることが明記されているが、ロンドン及びリヨン相場については価格のみで単価の重量単位については明示されていない。そこでまずこの平均価格の重量単位について、一八六〇〜六一年を例にとつて、横浜、ロンドン及びリヨン価格の関係をみると次のようになる。横浜相場ロンドン相場とを比較すると一ドル \parallel 五シリング二ペンスであるから、ロンドン相場一八シリング三ペンスは約三・五ドルに相当し、横浜価格の一〇〇分の一以下である。次に横浜相場とリヨン相場とを比較すると、一ドル \parallel 六・五フランであるから、リヨン相場五一フランは約七・八ドルに相当することに、横浜相場の四八分の一である。またロンドン及びリヨン相場の比率を求めると一対二・二となる。ここで第一に横浜相場がロンドン及びリヨン相場よりも高いという可能性はほとんど考えられず、また第二に地理的にも近接しているロンドンとリヨンの価格が隔絶しているという想定もほとんど妥当性をえない。横浜相場は一ピクル当り単価であることを基

準にして以上の二条件を満足するロンドン及びリヨン価格の単価当りの重量単位を推測すると、一ピクル \parallel 一三三・三三ポンド \parallel 六〇・五二キログラムであるから、ロンドン相場は一ポンド当り、またリヨン相場は一キログラム当りの単価であることが容易に知られる。これは第八表及び第九表、また両国の貿易統計、その他の資料に照らしても妥当である⁽⁴⁾。こうしてロンドン及びリヨン相場を各々ドルに換算し、さらに一ピクル当りの単価を各々求めると(4)欄及び(7)欄の数字をうるができる。さらに横浜売込相場とロンドン及びリヨン相場との比率を求めると、開港直後こそ八〇パーセント弱であるというものの、一八六〇〜六一年から一八七五〜七六年までの平均では横浜売込相場はロンドン及びリヨン相場の約八三パーセントとなり、これにヨーロッパまでの運賃⁽⁵⁾、保険料、その他の諸経費⁽⁶⁾を加えれば、ロンドン及びリヨン価格はむしろきわめて妥当な価格であったと結論づけることができる。

もちろん開港以降、とくに直後の時期においては銀に対する過大評価、あるいは日本人商人の国際市場知識の欠如のゆえに、外商が著しく低価格で購入し、ヨーロッパ市場で高価格で販売することによって一時的に高利潤をえた可能性を否定することはできないが、こうした状況が長期にわたって継続したと

は考えがたい⁽⁷⁾。日本糸はすでにみたように一定程度確立していたヨーロッパ市場に輸出され、このことこそ世界市場への編入を意味するのであるから、日本糸相場だけが著しく低く設定されたというのは非論理的で、むしろ日本糸相場も国際市場における市場価格に対応する形で設定され、規定されていたと考えることができる。

ちなみに日本の開港直前の一八五八年における上海輸出生糸価格は、一ピクル当り七里糸二六〇と四二五テール、大蚕糸一八〇と三二五テールであった⁽⁸⁾。銀行手形のレートにもとづいて一八五八年の為替相場を算定すると一テール \parallel 六シリング一七五ペンスで、これをかりに一八六〇と六一年の為替相場一ドル \parallel 五シリング二ペンスを用いてドルに換算すると、七里糸三〇九と五〇六ドル、大蚕糸二一四と三八七ドルとなり、一八六〇年代初期における横浜売込相場は七里糸と大蚕糸の中間で、中国糸に比較しても決して低廉ではなかったことが知られる。

註

(1) 『横浜市史』第二卷、三七九と三八〇頁。橋本重兵衛は明治一六年五月の製糸諮詢会で「明治初年ノ頃ハ日本生糸ノ価英貨二十二三志ニテ輸出セシモ外国ニ於テハ之ヲ四拾五志乃至五十志ヲ以テ販売スルニ至ル是レ外交未ダ開ケ

ズ商業未熟ノ為ニ僅ニ半価ヲ以テ買取ラレ徒ラニ大利ヲ奪ハレタルヲ知ル可シ」と述べている(『製糸諮詢会記事』八〇頁、『明治前期産業発達史資料』第八集(四)、所収)が、価格自体きわめて誇張されており、記述通りにはうけとりがたい。

(2) 『大日本蚕史』(正史)、一八九八年、二八〇と二八一頁(『明治前期産業発達史資料』別冊(六七)二、所収)。

(3) 実際には『大日本蚕史』の数字に〇・〇八を乗じて(〇)を算出しており、もし一ドル \parallel 五フランの誤植とすると、(〇)は一ピクル当り単価を一キログラム当り単価に換算した数字とほぼ一致する。一八六三年における前橋糸の横浜相場は四七〇と五八〇ドル(『横浜市史』第二卷、四二〇頁)、平均価格五二五ドルであるから、一八六二と六三年の為替相場一ドル \parallel 六・四〇フランを用いて、一キログラム当りの横浜相場を求めると五五・五二フランとなり、リヨン相場の七七パーセント、ロンドン相場の八二パーセントに相当することになる。

(4) 例えば『明治十一年度商況年報』では「(倫敦)……一封度ニ付……」、「(里昂)……一キロニ付……」と記載されている(『明治前期産業発達史資料』別冊(一八)四、所収)。

(5) ロンドンまでの運賃は、『横浜市史』第二卷によれば生糸一トンにつき六ポンドであり(三七九と八〇頁)、また『ジャパン・ヘラルド』によれば一八六六年には生糸一

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

トン当り四ポンドと四ポンド一〇シリングであった (*The Japan Herald*, No. 16, 1 Dec. 1866, in *Despatches from U. S. Consuls in Kanagawa 1861-97*, Vol. 3)。

生糸の場合運賃比率の低いことはすでに指摘されている (安場保吉「明治期海運における運賃と生産性」、新保博、安場保吉編『近代移行期の日本経済』、日本経済新聞社、一九七九年、所収、一二七頁) が、一八六六年のトン当り運賃を四ポンド五シリングとし、第一一表による一八六六と六七年の為替相場一ドル四シリング七ペンスにもとづいて一ピクル当りの運賃を求めると、一一・二ドルとなり、横浜売込相場の一・五パーセントにあたるにすぎない。

(6) 運賃、海上保険料、その他一切の諸経費は、生糸原価の一〇〜一五パーセントであった (「製糸諮詢会記事」九六頁、『明治前期産業発達史資料』第八集(四)、所収)。

(7) F. E. Hyde, *Far Eastern Trade 1860-1914*, London: A. & C. Black, 1973, p. 154. 郵便蒸気船の発達とともに、一八七〇年には電信が極東にまで延長されるようになったことは重要である (*ibid.*, p. 62)。ジャーディン・マセソン商会の横浜支配人ウィリアム・ケスウィック William Keswick は、一八五九年十一月に「生糸相場は中国とほぼ同じ相場になった」と書き送っている (W. Keswick to J. Whittall, Kanagawa, 21 Nov. 1859, in *JMA*, B10/9/15)。

(8) *CR 1858*, Shanghai, p. 20 (*BPP, CHINA*, Vol. 6,

p. 90).

(9) *Ibid.*

五、結びにかえて

本稿では世界経済というフレーム・ワークとの関連で、幕末、明治初期における日本の生糸輸出について数量的に検討してきたが、従来の説とは異なり、この期のヨーロッパ市場における日本糸は、初期を除いて、良質であったというよりも他の輸入糸に比較して相対的に良質であったにすぎないし、またロンドン及びリヨン市場における日本糸価格は低廉というよりも明らかに継続して高価格であり、たえずイタリア糸、中国糸、ベンガル糸との競合関係におかれ、粗製濫造による品質低下によって、市場拡大の可能性さえきわめて制限されていたといえる。また横浜売込相場は、ヨーロッパ市場における市場価格に対応して設定されており、従来いわれているような著しい価格差は存在しなかった。

養蚕、製糸業は主として季節的かつ集約的労働を基礎としているために、綿業に比較して先進国との生産力ないしは技術格差は小さく、それゆえにこそ日本糸が開港以降、従来の国内における製糸業の発展段階の高さに支えられて、国際市場で容

易に競争力をもつことが可能であったが、このことは逆に、生産力格差が僅少であるがゆえに、劣質の中国系、ベンガル系との競合関係にも容易にさらされざるをえないということをも意味していた。しかしながら、ヨーロッパ市場において日本系のもつシェアは中国系に比較してはるかに少なく、一定の市場確保のためには、日本系は必ずしも良質である必要はなく、むしろ相対的に良質でさえあればそれで十分であった。そしてこうしたヨーロッパ市場における日本系市場拡大の限界こそ、八〇年代以降急速にアメリカ向輸出に傾斜してゆかざるをえない必然性を内包していたといえよう。

開港後日本に進出してきた外商は、イギリス系のジャーディン・マセソン商会、デント商会、アメリカ系のウォルシュ・ホール商会など主として中国貿易の経験をもち、中国を本拠とする商会であった。⁽¹⁾幕末、明治期における貿易の中で外商のもつ重要性については改めて指摘するまでもないが、⁽²⁾外商に関する研究は非常に少ない。⁽³⁾外商の活動については別の機会にゆずりたいが、中国貿易においても一八六〇年代半ば以降は商社が乱立気味であり、⁽⁴⁾またすでにみたようにヨーロッパ市場においては中国系と日本系は相互に競合関係にあったために日本系輸出の増加は中国系市場の後退を意味し、さらに洋銀相場の変動に

も影響されて、生糸貿易は一般的に外商にとって必ずしも高利潤の達成を保証しなかった。⁽⁵⁾とくに資金力の乏しい外商の場合にはおのずから輸出市場が限定され、同時に取扱系についても特化せざるをえず、そのために一層投機的性格を帯びざるをえなかったといえる。

註

(1) 中国貿易における欧米商社の類型については、生糸貿易に関して、ジャーディン・マセソン商会のような一般商社と生糸取引にのみ特化した欧米生糸商の支店、代理店の二類型のあることがすでに指摘されている (G. C. Allen and A. G. Donithorne, *op. cit.*, p. 61)。

(2) 外商取扱高は、一八七四年輸出九九・四五パーセント、輸入九九・九七パーセント、また一九〇〇年は輸出六二・九四パーセント、輸入六〇・六一パーセントであった (高橋亀吉『明治大正産業発達史』、改造社、一九二九年、二二―三六頁)。

(3) 外商に言及した研究としては G. C. Allen & A. G. Donithorne, *op. cit.*, J. McMaster, *Jardines in Japan 1859-1867* (Gronigen, Druk V. R. B., 1966) 藤本実也、前掲書、中巻及び下巻、菅野和太郎『幕末維新経済史研究』(ミネルヴァ書房、一九六一年)がある。

(4) S. Marriner, *Rathbones of Liverpool 1845-73*,

幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討

Liverpool Univ. Press, 1961, p. 112.

(5) ジャーディン・マセソン商会の Summary Accounts によると、英国向生糸貿易は一八六七～六八年度利益五八、八一三ドル、六八～六九年度損失一四三、四二六ドル、六九～七〇年度利益五、九四七ドル、七一～七二年度損失一五、六七五ドルであり (JMA, A7/292)。¹⁾ マタフィールド・スワイヤー商会 (太古洋行) は、一八六八～八〇年の生糸貿易で約七八、〇〇〇ポンドの損失を蒙った (S. Marriner and F. E. Hyde, *The Senior, John Samuel Swire 1825-98*, Liverpool Univ. Press, 1967, p. 191) 一八七一～八四年は中国の欧米商人が利潤の継続的減少を喫いた時期でもあった (C. F. Remer, *The Foreign Trade of China, Shanghai: Commercial Press, 1926*, p. 41)。²⁾

〔本稿の作成に際しては、ロンドン大学の Prof. W. G. Beasley より貴重な助言をいただいた。記して感謝の意を表した。〕

get the men of same trade together and to revive the homogenous trade association.

Quantitative Review on Japan's Raw Silk Exports from 1859 to the Mid-1870s.

SHIN-YA SUGIYAMA

Raw silk was the most important export article from Japan during the process of industrialization. The development of the silk reeling industry in Japan was accelerated by the continuous increase in demand for Japanese silk overseas after the opening of the ports in 1859. It has been insisted in earlier studies, firstly, that the rapid increase of raw silk exports from Japan, mostly from Yokohama, was mainly due to its good quality and cheap price and secondly, therefore, that western merchants who dealt exclusively with raw silk exports enjoyed an enormous profit in the transaction owing to the difference in prices between Yokohama and the international markets (London and Lyons).

I intend in this article to review quantitatively these discussions on Japan's raw silk exports from 1859 to the mid-1870's with special reference to the London and Lyons markets where Japanese raw silk was transported, using mainly *British Consular Reports* and *the Jardine Matheson Archive*.

London was the distribution centre of the world silk trade in the middle of the 19th century. In the early 1860's Japanese raw silk was exported to Britain via Shanghai. After the opening of regular services to Yokohama by the Peninsular & Oriental Steam Navigation Company in 1864 and Messageries Imperiales in 1865, direct shipments to Britain and France increased. Though the shipments to Marseilles increased especially after the opening of the Suez Canal in 1869, London remained the central the market of the world silk trade until 1880.

Before Japanese silk was imported to Britain in 1859, Chinese silk took a share of 70-80 per cent of Britain's total raw silk imports and established a predominant position in the London silk market. Japanese silk was first welcomed with enthusiasm and its imports increased to 2,294 thousand lbs. in 1863, or 27 per cent of Britain's raw silk imports. However, the

quality of Japanese silk deteriorated in the following years and its imports were continuously stagnant partly because of the deterioration in quality and partly of the increase in imports of Chinese silk. The price of Japanese silk both on the London and Lyons markets had been continuously high during this period. In both quality and price, Japanese silk remained in keen competition with Italian, Chinese and Bengal silk, and, though its quality was comparatively better than Chinese and Bengal silk, the possibility of expanding its market was restricted due to the stagnation of the domestic raw silk production and the decline in quality.

The second discussion concerning the difference in prices turns to the miscalculation of the exchange rates. Reviewing carefully prices in Yokohama, London and Lyons, the price in Yokohama was about 83 per cent on average of the prices in London and Lyons, which was quite reasonable, if freight, insurance and other expenses were included. It is necessary to pursue a detailed study on the operations of western merchants in Japan.

Thought and Behaviour of the Silk and Rayon Textile Manufacturers on a Small Scale before and during the Second World War

SEISUKE KUROSAKI

It is said that the historical studies have not been made concretely enough of the middle class in the cities in modern Japan. It is felicitous that Keiichi Noguchi, filling this void, recently wrote *The Study of the History of the Lower Middle Class Movement in the Cities* (1976). In it he discusses in detail the democratical movement of the lower middle class in the cities, that is, the thought and the behaviour of the political parties (such as the Republican Renewal Party, *Kyoowa Isshin Too* established in 1931) in the preparatory period and the period of maturity of the Japanese fascism. After these periods comes what Masao Maruyama termed the consummation period of the Japanese fascism (*Thought and Behaviour in Modern Japanese Politics*, 1956).

This article intends to analyse the thought and behaviour of the lower middle class citizens in the latter period. When the Imperial Rule Assist-